

道外の縄文の構成資産から

～史跡 田小屋野貝塚(青森県つがる市)～

6000年前のプレスレット工房！？

田小屋野貝塚の特徴は、「数少ない日本海側の貝塚！（貝塚の多くは太平洋側にあるんです）」であることはもちろんのこと、なんとと言っても特筆すべきは、「大量に出土したベンケイガイの貝輪（プレスレット）の未製品の数々（その数50点以上！）」です。

これだけの数の未製品が残されていたことから、おそらく当時の田小屋野に暮らした人々は、「プレスレットの職人集団」だったのではないのでしょうか！？そんな「MADE IN 田小屋野」と考えられる貝輪（プレスレット）は、ここ北海道でも見つかっています。



▲ベンケイガイ製の貝輪
(提供：青森県立郷土館)

「ベンケイガイのプレスレットが当時の流行だった！？」「当時の最先端の交易品だったのかも？」などと想像を膨らませてみるのも楽しいですね。

実際に、田小屋野貝塚からは北海道産の黒曜石も見つかっており、当時の人々が海を越えて活発に交流を行っていたことがうかがい知れます。

遺跡 DATE	○時期 縄文時代前期～中期(約6000～4500年前)
○所在地 青森県つがる市木造	
○出土物	ベンケイガイ製貝輪未製品、イルカ・クジラの骨、貝類(ヤマトシジミ、イシガイ)、女性の人骨など
○問合せ	つがる市教育委員会社会教育文化課(0173-49-1194)

ちよこっと 縄文イベント情報 * 詳細は、チラシやホームページ等でお知らせします。
* 皆様からの情報もお待ちしております！

北海道の古代集落遺跡 縄文とアイヌの間に

2019年度 地域の文化財普及啓発フォーラム
 ■日時：12月6日(金) 14:00～16:30 ■日時：12月8日(日) 13:30～16:00
 札幌・北海道大学学術交流館 根室・根室市総合文化会館 多目的ホール
 ※詳しくは同封のチラシをご覧ください。

縄文バスツアー「北海道の縄文遺跡 構成資産をめぐる」

■日程：令和元年(2019年)11月16日～17日
 ■内容：世界遺産推進候補の構成資産・関連施設をめぐります！
 <1日目> キウス周堤墓群(千歳市)、北黄金貝塚(伊達市)、入江・高砂貝塚(洞爺湖町)、八雲町郷土資料館 など
 <2日目> 大船遺跡(函館市)、函館市縄文文化交流センター、垣ノ島遺跡(函館市)、森町遺跡発掘調査事務所 など
 ■問合せ：株式会社シーピーツアーズ
 電話 011-221-0912

編集 『北の縄文』秋号の発行にあたり、菊谷伊達市長様からメッセージをお寄せいただき、お礼申し上げます。北の縄文の世界遺産登録の実現とその後を見据えて、今、内なる充実をはかり、次のステージへの備えが必要です。編集局一同、今後とも縄文パワー全開で、会員の皆様にご愛読いただける編集に努めて参ります。(T.H)

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 編集長 谷 紘道 編集委員 村上、墓田、西島
 TEL: 011-221-1122 FAX: 011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp



HOKKAIDO JOMON CLUB NEWSLETTER 秋 2019
 北の縄文 VOL.13

目次	■北の縄文コラム	・・・P1
	■北の縄文セミナー@チカホ 講演録	・・・P2～4
	■縄文トピックス	・・・P5
	■道外の構成資産から/イベント情報	・・・P6

北の縄文コラム

伊達市長からメッセージ

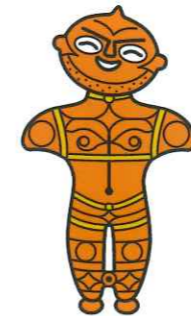
令和元年7月30日に開催された文化審議会世界文化遺産部会において、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産推薦候補に選定されました。これまで縄文文化の魅力発信し、世界遺産登録へ向けた機運を盛り上げてこられた北の縄文道民会議や地域の方々をはじめ、多くの皆様に御支援・御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つである北黄金貝塚を有する伊達市としては、世界遺産登録へ一歩前進したことに多少の安堵感はありますが、令和3年の世界文化遺産登録の実現に向けて、まだまだ課題も多いと実感しております。なかでも、来年秋頃に予定されておりますイコモスによる現地調査に向けては、関係各位と協力しながら、入念に準備を進めていく必要があります。

また、世界遺産登録後を見据えて、地域の方々や自治体間の新たな連携のあり方や縄文文化の活用の方法などを模索していかなければなりません。世界遺産登録を契機に、道内各地の縄文遺跡に光があたり、道民一人一人が郷土に誇りを抱けるような取り組みを、北の縄文道民会議の皆様とともに進めていければと考えております。

思えば20年前、北黄金貝塚公園で市民の皆様とともに植えた小さな苗木は、現在では大きく成長し「縄文の森」となりました。一步一步進んできた「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録への動きもまた、今まさに大樹となり実を結ぼうとしております。伊達市としても、世界遺産登録の実現に向けて、今後も全力で取り組んで参ります。引き続き皆さまの御支援・御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

伊達市長 菊谷 秀吉



北の縄文セミナー@チカホ

7月26日～28日、札幌駅前地下歩行空間にて開催した「北の縄文セミナー」の様をお伝えします！

「音江環状列石」 ～むかしを伝える‘みえる’遺跡～

深川市教育委員会
学芸員 百々 千鶴 氏

音江環状列石は、深川市音江地区にある稲見山丘陵山頂付近に所在しています。稲見山丘陵は音江連山の山裾から延びる丘陵で、環状列石付近の標高は110m程です。

近年、環状列石・配石遺構は、日本全国で400箇所近く発見されています。北海道内でも現在28箇所が確認されており、そのうち国指定史跡は3か所で、音江環状列石はその中の一つです。

さて、「みえる遺跡」というのは聞きなれないフレーズかもしれません。日本の土壌は酸性であることが多いため、遺跡が営まれた当時の有機物のほとんどは腐食し、周囲の影響を受けながら次第に土中に埋没してしまいます。そのため、竪穴住居のような遺跡は、発掘しなければ当時の姿を確認することができず「みえる」ことはありません。しかし、環状列石は、地上に石を配置した立体的構造であるため埋没しにくく、当時の状態をある程度留めており、発掘せずともその姿を「みる」ことができます。この「みえる」という特性から、地域の人々に認識されやすく、その地にあることが後世に伝わりやすい遺跡といえるでしょう。



▲音江環状列石（深川市）

音江環状列石の存在が初めて公表されたのは、明治27年、高畑宜一氏の「石狩川沿岸穴居人種遺跡」によるものです。

しかし、深川市の郷土資料には、それ以前に移住者がしば刈りの最中に環状石籬を発見したという記録や、百年前から環状列石があったと父親から聞いたという記録があり、「みえる」遺跡だか

らこそ、早い段階から地域の人々に認識されていたことがうかがえます。

高畑氏の発表後、様々な研究者が環状列石を訪れ調査を実施しました。そして、昭和28年から昭和31年にかけて、東京大学考古学研究室の駒井和愛氏により本格的な発掘調査が実施され、13基が調査・記録されました。この結果、環状列石の下にはそれぞれ坑があり盗掘されている可能性があるものもいくつかあること、ニセコ町の曾我北栄環状列石と似た様相であること、土手があり北と南に区分されている様子であること、南側のもの方がわずかに新しい時期である可能性があることなどを指摘しています。遺物は、ひすい製・滑石製装飾品や黒曜石製石鏃、土器片、石匙、朱漆塗りの弓などが出土しており、これらから縄文後期の墓と結論付けられています。朱漆の弓は石鏃の束や多数のひすい玉とともに11号墓から出土し、頻出するものではないため貴重な資料です。

さて、深川市では、平成13年、26年に音江環状列石の測量調査を実施しています。この調査では、現状の配石状況の記録と、駒井氏の調査報告と現状の配石状況の差異の明確化を目的に実施されました。その結果、新たに番外の環状列石が6箇所発見され、配石状況については、最近動いたとみられる石が少なからずあることが確認されています。「みえる」ということは、地表にあるため発見されやすく、動植物の影響や盗掘など様々な要因で破壊される可能性が高いというデメリットがあります。このため、後世まで保存していくためには、現状が変更されていないかの確認と記録を継続的に行うなどの工夫が必要といえます。

現在、音江環状列石は、つくられた当時の姿にできるだけ近い形で来訪者にみていただきたいと考え、柵は設置せず、遺跡に影響がないよう配慮しながら、可能な限り自然の状態で保存しています。このため、環状列石の石に直接接触することや、間近で環状列石を観察することができます。今後も、みえる遺跡のメリット・デメリットを考慮し、訪問する方々の理解とご協力をいただきながら、変わらぬ姿を後世に引き継いでいきたいと考えています。



「入江・高砂貝塚の保存活用とまちづくり」

洞爺湖町教育委員会
主幹 角田 隆志 氏

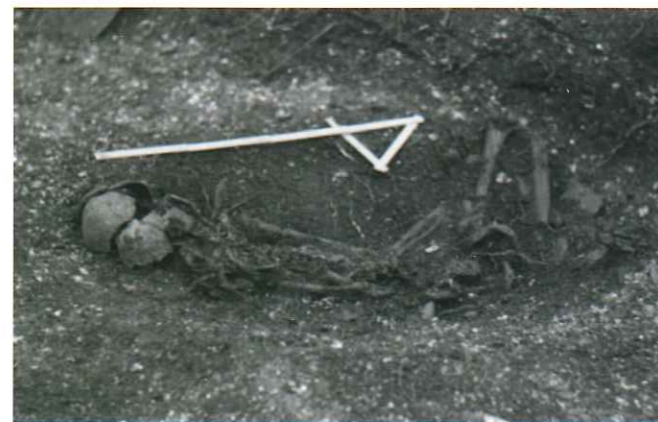
世界文化遺産登録目指す「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値は、「採集・漁労・狩猟を生業の基盤とした定住生活」、「1万年以上にわたって長期間継続した」、「独特で高度な精神文化の発展を成し遂げた」ことなどが挙げられます。農耕文化に見られるように土地を大きく改変することなく、森林資源を管理するなど1万年以上にわたって採集・漁労・狩猟を基盤とした生活を継続したことなどが特徴です。

入江貝塚と高砂貝塚では、「定住」の物証となる竪穴住居跡が見つかっています。また、貝塚からはお墓が15基見つかっています。ポリオ（小児麻痺）にかかった人骨も見つかっており、少なくとも10年間は介護が必要な状態で過ごしたと考えられています。こうした人が日々の生活を営み続けることができたのは、定住していたからこそ可能だったのであり、相互扶助という当時の生活文化がわかります。

高砂貝塚からも縄文時代晩期のお墓28基が見つかっています。お墓の周辺には配石遺構もつくられて、墓前祭祀が行われたことを示しています。これらのお墓からは、妊産婦のお墓や抜歯の痕跡のある人骨も見つかっており、縄文人の暮らしや風習をうかがい知ることができます。

また、高砂貝塚では、縄文時代晩期の中ごろにつくられた貝塚が見つかっています。

貝類ではタマキビ類やアサリなどが多く、魚類ではカレイなどが見つかることから、遺跡の周辺には岩場を含めた砂浜が広がっていたことがわかります。



▲妊産婦の墓（高砂貝塚）



入江・高砂貝塚の保存整備

入江貝塚は国の史跡に指定されています。昭和58年から遺跡の内容と範囲を把握するため、詳細分布調査を行い、国史跡指定を経て、平成7年から9年まで、史跡整備を行いました。このとき、入江貝塚の特徴である貝塚の断面剥ぎ取り展示や竪穴住居の復元などを行いました。

一方で、高砂貝塚は、平成5～9年に史跡指定に向けて詳細分布調査を行い、平成14年に入江貝塚へ追加指定となり、名称が「入江・高砂貝塚」となりました。平成15年から有識者からなる「史跡入江・高砂貝塚整備検討委員会」を設置し、整備に向けた検討を行いました。



高砂貝塚では史跡整備事業を平成27年から行っています。整備の主な内容は、縄文時代の貝塚とお墓、近世アイヌ文化期に作られた貝塚と畑跡、さらに小川を整備することです。これらはすべて発掘調査で確認されています。

整備に際しては、高砂貝塚の価値を保存することはもちろんですが、縄文から現代まで連続と人の生活が営まれ続けてきたこと、そして、人と自然との共生の場として、縄文のたたずまいを表現することにより、高砂貝塚の特徴を最大限に生かすことができ、同時にすでに整備された入江貝塚、ガイダンス施設とあわせて遺跡の理解を深めていければと考えています。整備はガイダンス施設の増改築とあわせて令和2年度に完成する予定です。

以上は主にハード面の整備となりますが、ソフト面においては、体験学習などの「文化的要素」、野草や水生生物の観察会などの「自然的要素」、縄文まつりなどの「まちづくり的要素」など、現在行っているものも合わせて整備後も継続して実施したいと考えています。さらに、私たちは、学校と連携して遺跡についての出前授業を行っています。こうした取り組みは将来を担う世代に遺跡の価値を伝えていく上でとても重要だと考えています。

以上のように、史跡整備が行われることによって地域にとって様々な可能性が広がっていきます。整備された史跡を地域のために、どのように役立てていくのかを専門家や地域の方たちと共に考えて実践していきたいと考えています。